

灰の水曜日

2010.2.17

ヨエル 2・12-18

二コリント 5・20-6・2

マタイ 6・1－6,16-18

「今や恵みの時、今こそ救いの日」。今日の灰の水曜日から始まるこの四旬節が、私たちとて、コリントの教会へのこの使徒のことばのとおり、「恵みの時、救いの日」となることを願って、祈りのうちに、ともに呼びかけられている回心の道を歩んでまいりたいと思います。

回心とか四旬節の務めということばを聞くと、何か暗く、重苦しい印象を受けるかもしれません、四旬節の本来の意味は、今この時も神から与えられている恵み、神がその御子、イエス・キリストを通して私たちに与えてくださった救いの恵みに立ち戻ることにあります。何故、このような四旬節の時が私たちにとって必要なのかと言えば、普段の生活の中で、私たちがカトリックの信者として受け入れたこのような恵みのありがたさを十分に味わうゆとりを持つことが困難だからです。「神からいただいた恵みを無駄にしてはいけません」と使徒は言いますが、次から次へと押し寄せるように私たちの心を締め付ける生活の重荷が、いつもたやすく、洗礼の時にいただいた私たちの信仰の灯火を吹き消してしまうからです。

四旬節は、私たちのカトリック信者としての信仰に立ち戻るための回心の時です。私たちの心にカトリック信者としての信仰の灯火を再び燃え上がらせるための恵みの時です。そして、私たちのこの信仰の灯火は、神の私たちへの愛の炎に触れることによって、私たちのうちに灯されたいのちの灯火です。それゆえに、私たちのカトリックの信者としての信仰への回心は、私たちに示されている神の愛に向かっての回心です。神は私たちへの愛を、イエス・キリストの十字架死と復活によって示してくださいました。そこに私たちの回心が目指す、神の愛の懐が開かれているのです。その懐に再び抱き取られるようにして、神の愛を味わうことが四旬節の目指す、私たちの回心であるのです。

「神と和解させていただきなさい」とコリントの教会への手紙の中で使徒は私たちにも勧めています。神と和解させていただくとは、イエス・キリストの十字架において示されている神の愛に立ち戻るということです。神との和解は、私たちが申し出る前に、神の方から私たちに向けて差し出されている和解の手を握ることに掛かっています。神はイエス・キリストの十字架において私たちに和解の手を差し伸べておられるのです。

神がこの世界をその愛によって創造されたのなら、何故この世界にはこれほ

どの不条理な苦しみがあるのか、神が全能の父であるなら、何故神は私たちからこのような苦しみを取り除いてはくださらぬのか。神が本当におられるなら、何故神はご自分をこの世界に示してはくださらぬのか。神への信仰を宣言し、キリスト者になっても、むしろ、神を信じる者であるがゆえに、私たちの心の奥底には、このような神へのうらみつらみがどす黒く澁んでいます。そして、私たちのこのような心の奥深くの神への叫びは、神には届くことがないと決め付けてしまっています。しかし、果たしてそうなのでしょうか。神は私たちのこのような心の叫びに、耳を閉ざして、知らぬふりをなさっておられるのでしょうか。あるいはそもそも、私たちが信じてきた神などおられないということなのでしょうか。そうではありません。イエスの十字架のお姿は、私たちの積年の、神に対するうらみつらみの責任を神自らお取になっていてくださる、神の私たちへのこれ以上にはない愛の誠意の証なのではないでしょうか。

このことが分かるためには、私たちは神の御前にあって、自分が何者であるかを顧みる必要があります。この四旬節の始めに額に灰を受けるのはそのためです。「あなたは塵であり、塵に帰ってゆくのです。」灰の式の中で司祭が告げる、この私たちの現実の真理を受け入れることが出来る時、私たちの側からの神との和解のための条件が整うのです。神は私たちには及ばない高みにあって、和解の手を差し伸べようとしておられるのではなく、いずれは塵に戻る私たちのもとにまで来てくださり、イエスの十字架の死を通して、やがては地上の生活のおごりの全てを奪われ、死に行く者としての私たちに和解の手を差し伸べてくださっているのです。あなたの苦しみを取り去らなかつた代わりに、わたしもあなたの苦しみの全てをあなたとともに担つてることを分かつて、ここイエスの十字架のもとでわたしと和解してほしい、神はそのようにして、私たちに和解の申し出をしてくださっているのです。神に背き、その罪のゆえに楽園を失った人間が築き挙げてきたこの世界においては、神と人の和解はこのようにしてしか実現し得ないです。「神と和解させていただきなさい」使徒のこの勧めを聞き入れることが出来た時、私たちは自分が和解させていただいたお方がどのようなお方であるかを真実知ることが出来ることでしょう。

神がいてくださっても、この世に救いはないことを私たちは受け入れなければなりません。イエスの十字架の死が、私たちにそのことを示しています。けれども、イエスの十字架は、この世に救いがないことを呪う私たち全ての者に対する神の謝罪であり、和解の申し出です。差し出されたこの神からの和解の手を私たちが握り締めることが出来た時、神から見捨てられた者のように十字架の上に死んだイエスを死者の中から復活させられた、神の絶大な力を私たちもこの身において知ることが出来るのです。神と和解させていただくのはそのためです。いやむしろ、神がイエスの十字架において私たちに差し出しておられる、こ

れ以上にはありえない愛の和解の申し出はそのためであるのです。

このことが本当に分かったら、せめてこの四旬節中、私たちは自分の心の小部屋に身を置いて、そこに語りかける神の呼びかけに耳を澄ますことが出来ることでしょう。預言者が言う、「お前たちの心を裂け」ということがどういうことであるかが分かってくることでしょう。この世の苦しみにあえぐ私たちのために、ずっと以前からその心を裂き続けておられる神の愛の呼びかけを、裂かれた心になって受け入れることが出来ることでしょう。神と私たちの双方がともに裂かれた心と心を通わせあうことが出来る時、私たちの神との和解は成立するのです。そのような恵みを願ってこの四旬節の間、私たちの心の小部屋のイエスの十字架の前に身を置くようにしたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高